

みんなに教えたいくなる！

室根町の豆知識 ②

室根っていいな！



自分の住む地域のことを 語れる大人になってほしい。

室根にはまだまだ知らないことがあるかもしれない。

室根で育ち、これからたくさんの世界を知るみなさんには、地元のいいところをもっと知ってもらいたい。

「みんなに教えたくなる！室根町の豆知識②」は、前回紹介しきれなかったこともっと知ってほしくて作りました。この冊子をつうじて、みなさんの「室根をもっと知りたい！」が育ってくれたらいいな、と思っています。



もくじ

まえがき	01
いちのせきハラミ焼なじよったべ隊	03
室根の太鼓文化	04
コラム Part_1 — 室根神社特別大祭	05
中津谷川イルミネーション街道	07
森は海の恋人植樹祭	08
コラム Part_2 — 室根のお菓子街道	09
ピンクリンドウ	11
浮野遺跡	12
コラム Part_3 — まだまだあるよ！室根産	13



いちのせきハラミ焼なじょったべ隊

豆知識 09

「いちのせきハラミ焼」を知っていますか？いろいろなイベントに参加しているので食べたことのある人も多いと思います。「食」を通して一関を全国にピーアールしよう！と活動している「いちのせきハラミ焼なじょったべ隊」。

鶏総裁を務める山本郷さんと頭鶏を務める星和行さんにお話を伺いました。

「なじょったべ隊」結成のきっかけ

室根市民センター「青年ふれあい塾」の活動の中で、地域グルメでまちおこしをする「B-1グランプリ」に出てみたい！というのが最初です。メニュー開発のために持ち寄った食材の中に鶏のハラミがあり、昔は室根地域の家庭料理で食べていたという話もあって、それを復活させ、B-1グランプリへ出場を目指すことにしました。視察や研修などを経て2011年に「いちのせきハラミ焼なじょったべ隊」を結成。本格的に活動がスタートしました。それから現在に至るまで、B-1グランプリへの出場や様々なイベントに出展しながら一関市の魅力を発信しています。



2019年にはB-1グランプリ in 明石に出展

B-1グランプリとは？

正式名称は、「ご当地グルメでまちおこしの祭典！B-1グランプリ」。「B-1」は地域ブランド(BRAND)の「B」と数あるまちおこしイベントの最高峰を目指す「1」を組み合わせた言葉。B-1グランプリに出展するためには、愛Bリーグ本部に加盟した団体で、「食のまちおこしを通じて、地域を元気にしよう」という志を持った、まちおこし活動をしていることが求められます。

お話をしてくれた方



鶏総裁
やまもと あきら

山本郷さん(右)

頭鶏
ほし かずゆき

星和行さん(左)

室根や一関全体でも、人口や子どもの数が減っていて、地元を離れてしまうと戻ってこないとよく聞きます。けれど、子どもたちには地元の良さをもっと知ったうえで、一度地元を離れるのは良いことだと思います。地元以外で、いろいろな知識や経験を吸収し、ふるさとの文化や言葉を大事にし、広い視野を持った人になってほしい。私たちは、みなさんが地域の外から地元を見たときに「いつか帰ってきたい」と思えるように活動していきたいですね。

室根の太鼓文化

豆知識 10

室根地域では、各地区で昔からお祝い事などの時に太鼓でお囃子を演奏してきました。現在では地区の打ち囃子団体も減ってきていますが、地域での継承のほか、小学校や中学校で太鼓指導をするなどし、これまで続いてきた太鼓文化を途絶えさせないように取り組みを続けています。室根の太鼓文化について、奥野幸市さんにお話を伺いました。

太鼓文化を伝える取り組み



写真上/室根中学校生徒への太鼓指導

写真下/昔の子どもうちばやしによる演奏の様子

室根に伝わる太鼓の多くは宮城県北にルーツがあります。昔は各地区に太鼓や笛などを教える人がいて、行事があれば演奏する機会も多くありました。昭和頃まではどの地域でも活動していましたが、平成以降、子どもの減少とともに太鼓に関する取り組みも減っていきました。現在は浜横沢地区、屋中地区、上折壁地区に「うちばやし」の保存会がありますが、他にも創作太鼓の団体もあり、その中で小学校や中学校でも取り組むようになり、小学校では卒業前に生徒間で太鼓を教え伝えるのが恒例となっています。

発表の場がなければ伝える機会が減ってしまう。室根では行事のたびに太鼓演奏の場があり、子どもたちも小さいころから演奏を聴いていて下地ができていますので太鼓の文化が根付いているのではないのでしょうか。

お話をしてくれた方



むろね南流太鼓
おくの こういち
奥野 幸市 さん

郷土芸能での「うちばやし」は全国的にも珍しく、多くは宮城県北、特に気仙沼地方から伝わるとされています。昭和から平成の初め頃には室根町内にもたくさん「うちばやし」の保存会があり、地域に根ざした文化でした。現在は、環境の変化もありだんだん保存会が続けられなくなってきています。その中で、太鼓文化を学校でも取り組んでもらえていること

は、地域の世代間交流や文化の伝承・継承につながっていると思います。

太鼓の音は昔から「心臓の鼓動に似ている」と言われ、鼓動は人間にとって一番身近な音。小さい頃から太鼓に親しむことで、みなさんが将来ふるさとを離れても、太鼓の音を聴いたときにふるさとを思いだしてくれると思います。

むろねじんじゃとくべつたいさい

室根神社特別大祭

室根神社特別大祭は昔から地域と深く関わってきたお祭りで、国の重要無形文化財にも指定されています。熊野(今の和歌山県)の神様を室根にお迎えした718年から続いていて、神役と呼ばれる人たちは代々、お祭りのときには家に伝わるそれぞれの役目をはたします。

深く知るとよりおもしろい、歴史のあるお祭りなのです。



みこシスターズ
〈室根大祭PRキャラクター〉



大祭のはじまり

昔々、みんなの住むこの室根がまだ「室根」でなく、室根山もまだちがう名前と呼ばれていたころ、東北には「蝦夷」と呼ばれる民が住んでいました。

蝦夷は強く、日本全体を治めようとする大和朝廷にも反抗し、争うことをやめません。

そこで、大和朝廷は神仏の力を借りて、蝦夷の力を抑えようと考えました。

718年、朝廷の使者が紀州熊野本宮から神様を分霊してもらい、船で唐桑の港までお連れしました。室根の地に入ると、鬼首山(今の室根山)をみた神様が「この山にいたい」とおっしゃったので、社を立ててお祀りすることになりました。



1 室根神社神事

神殿からお神輿に神様を移します。いっさいの明かりを消し、宮司の手でのみ行われます。

2 お神輿のお下り

神様を乗せた2つのお神輿は、たくさんの陸尺(ろくしゃく)と呼ばれるかつぎ手とともに、まだ夜中の暗い山道を降りてきます。

3 田植えの段

五穀豊穡を祈り、田植歌を歌いながら田植えのまねをします。

4 神門祭

3合目にある石の鳥居のところで、大先司や馬の一行が参道を降りてきたお神輿の一行を出迎え、ここで馬に「神うつし」が行われ、御神馬になります。

5 孔雀とり

お神輿の上の鳥が、お神輿が近くまで来たことを知らせに飛ぶ様子を表して、御神輿についた鳥の飾りを持った陸尺が先を競ってマツリバまで走り、お仮宮の上に掲げます。

6 マツリバ先着争い

本宮の神輿と新宮の神輿をお仮宮の上まで持ち上げます。昔はどちらが先に上に着くかでその年の豊穡を占う意味もあったそう。

7 褒祭り巡行

曲ろく(紙で作った大きな牡丹の造花)を背につけた馬と山車、大名行列が練り歩き、祭りへの参拝の様子を再現しています。

毎年11月23日から1月7日までの期間、中津谷川地区ではイルミネーションが街道を華やかに飾ります。テレビなどにも取り上げられ、冬の観光名所としてすっかり有名になりました。中津谷川イルミネーション同好会（佐藤守一会長）のイルミネーションのきっかけを作った佐藤好彦さんにお話を伺いました。

地域を照らすイルミネーション

イルミネーションで通りを装飾し始めたのは平成22年のことでした。その頃地域では高齢化が進み、この地区の商店がなくなっている状況でした。町の中がどんどん暗くなっていくようで、何か明るい話題を作りたいのが始めたきっかけです。

当初はたったの2軒からのスタートでした。それから10数年、今では参加する世帯が30軒以上になっています。飾る場所は公共施設なども含め40軒以上に増えています。一人暮らしの高齢者のお宅などは近所の人々が助け合って飾ることもあります。様々なイルミネーションの飾りを各家で少しずつ増やしながら、徐々に今の華やかさになりました。



お話をしてくれた方

中津谷川イルミネーション同好会 事務局長

さとう よしひこ
佐藤 好彦さん

この取り組みは、強制ではなく参加者が自由に出来たのが良かったのだと思います。何事も愛着がわくと楽しいし、自分のこだわりを発揮できると楽しさも増えますよね。みんな「自分で飾った所が一番！」と内心想ってるんじゃないかな。気持ちも町も明るくしたい、と始めたことなので、毎年「明るい話題」として取り上げてもらえるのも嬉しいです。

子どもたちにも地域の明るい話に触れてもらって、自由な発想で、明るく元気に育ってほしいと思います。



森の自然が豊かになると、海も元気になる。元気な海から蒸発した水が、空を巡って森をさらに豊かにする。森と海のいい関係が続けるために、矢越地区で毎年開催されている「森は海の恋人植樹祭」には、全国各地から矢越山に木を植えに来る人たちがいます。

キミは参加したことがあるかな？

植樹祭が地域にもたらしたもの

始まりは平成元年、第1回目の「森は海の恋人植樹祭」は室根山で開催されました。当時、宮城県唐桑町の漁師で、海の環境を守るため植樹活動を行っていた畠山重篤（しげあつ）さんの声かけがきっかけでした。現在では皆さんも知っての通り、矢越山で植樹活動を続けています。

「人の心に木を植える」

東日本大震災が起きる数年前から、「大きな地震がきたらどう動くか」ということを皆で考えていました。実際に東日本大震災の発生時には、私たちの自治会では自然に人が集まり、被災した気仙沼市に物資を届けたり、入浴施設を手配したりと、多くの協力を得て独自の支援を行いました。この行動が出来たのは、植樹活動をする中で育まれた自発的な行動のおかげでした。植樹活動を表現する言葉で、「人の心に木を植える」というのはまさにこういうことだと思いました。



お話をしてくれた方



室根町第12区自治会長

みうら みきお
三浦 幹夫さん

山に入ると自然は自分で豊かになる力を持っているんだなあ実感します。私たち人間は、その一部に触れることで心を育ててもらっていますから、畠山重篤さんや地域住民とは今後も植樹祭は続けていこう！と話しています。

子どもたちがいろいろなことに興味を持って挑戦できる環境を我々が作ることで、皆さんが将来の進路を決める力になり、結果としてそれが地域づくりにつながれば嬉しいです。



室根の お菓子街道

かつて折壁地区の気仙沼へとつながる街道沿いにお菓子屋さんが何軒もあったのを知っていますか？

今はもう閉店したお店もあるけれど、最も多い時には8店舗あったほか、お菓子の工場（こうば）もあったそうです。室根のお菓子について調べてみました。



人口の少ない室根に なぜ沢山の菓子屋さんが？

残念ながら詳しい理由までは分からなかったけど、室根では昔から買い物や商売で気仙沼方面に行く人が多いので、行って帰ってくると一休みするのにちょうどいいのが折壁あたりだったみたい。手土産を買ったり休憩したりにちょうどいいのでお菓子屋さんが増えたのかもしれないね。



かつての折壁の商店街

室根名物「白あんぱん」。

パンじゃないのになぜ「あんぱん」？

室根地域で長く親しまれていた「白あんぱん」というお菓子を知っていますか？白あんぱんなのにお菓子なの？この謎について「白あんぱん」の千葉本店（2023年12月末に閉店）千葉利有（としあり）さんにお話を聞きました。

『私たちがよく知っている「パン」は小麦粉を練って発酵させてから焼くものが多いけど、昔は小麦粉を練って焼いただけのものも「パン」と呼ば

れていたこともあり、この名前にしたんじゃないかと思います。ただの菓子パンにならないよう、白さざぎのあんを包んで焼いた生地には水あめと白砂糖をまぶして和菓子に工夫していました。

昭和43年の「第17回全国菓子大博覧会」では金賞を受賞し、静岡や神奈川など他県にもファンがいました。創業150年ほどになるけれど、室根から世間に広めるようにつとめていたよ。』



室根の代表的なお菓子

今も販売されている室根の代表的なお菓子を紹介します。お店の人にお話を聞きました。



お菓子とうふ

朝日堂製菓

一番人気のあるお菓子は「むろねお菓子とうふ」です。お客さんとのコミュニケーションの中で、お客さんがどんなお菓子を求めているか考え、新しい材料を研究したりしています。

いま子どもの皆さんには、自分の夢に向かって、あきらめずに頑張れる人になってほしいと思います。



きらら

扇家菓子舗

子どもからお年寄りまで幅広く人気があるのはケーキや「きらら」です。皆さんにおいしく食べてもらうため、日々、勉強や探求して心をこめて作ることを大切にしています。

これから大人になる皆さんには、素直な気持ちで、好きなことにまっすぐ挑戦してほしいです。



だんご

金成屋

最初に作り始めた「しょうゆ」のだんごが今でも一番人気があります。柔らかくてコシがある食感を大事にしているので、いつでも作りたてに近いものを売るようにしています。

ここでしか食べられない味なので、皆さんが大人になって、どこからか帰ってきたときでも故郷を想って懐かしく食べてもらえたらいいなと思います。

室根地域では、リンドウの花がさかんに栽培されていた時期があります。当時、室根ならではの品種が作れないか、と花農家の仲間で作ったオリジナルの品種がありました。開発したのはピンクの色合いが可愛らしいリンドウ3種。そのリンドウの株がまだ残っているということで、当時品種を開発した一人である菅原隆儀さんにお話を伺いました。

ピンクリンドウってどんな花？

昭和の終わり頃から平成の初頭にかけて、岩手県では「苗からではなく種から栽培する」という方法でリンドウの栽培が推奨されていました。室根地域でもリンドウを手がける農家が増え始め、品種改良ができる人との出会いもあり、試験場で種を作ってもらい、平成8年に室根地域オリジナルのリンドウの品種を登録しました。「ときめきむろね」「ささやきむろね」「ゆめむろね」という名の3種類があり、ピンク色の花びらが特徴のリンドウです。

しかし、花の色合いを保つのが難しいことなどもあり、だんだんと小菊や他の花の栽培に移っていった農家さんも多くいました。今では室根地域では生産者がほとんどいませんが、かつてはお盆やお彼岸などにお供える花として需要の高い花でした。



お話をしてくれた方



すがわら たかよし
菅原 隆儀 さん

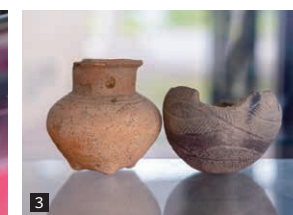
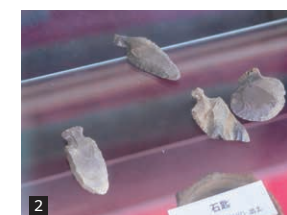
子どもたちには、自分の興味のあることを大事にしてもらいたいです。「自分が何をやりたいか」をしっかり考えて、与えられた環境の中であきらめずにやり続けること。ピンクリンドウの開発は人との出会いの中から始まりました。困ったときお互いに相談したり、助け合えたりする人達が周りにいると、そこからまた縁が広がることもあります。一人でやることには限度があるから、仲間がいることも大事ですね。

みんなが住む室根で縄文時代の「遺跡」が出土している事を知っていますか？津谷川の浮野地区で見つかった「浮野遺跡」では縄文時代に加工された石器や土器などが発見されています。なぜ室根に？どんなものがあるの？自宅の敷地から遺跡が見つかったという及川昇一さんにお話を伺いました。

どんな遺跡が出土したのですか？

津谷川浮野地区では縄文時代の遺跡が数多く出土しています。その中に、切り出した岩を削って棒状に形を整えた石棒（せきぼう）と呼ばれる石器があります。研究者の先生によると、儀式やお墓に埋葬するときの副葬品として使われるもので、遠く北海道の遺跡からも同じようなものが見つかることから、この地域一帯が石棒の加工場・産地で、ここから東北各地や北海道まで運ばれていたと考えられているそうです。出土した遺跡には石棒の他にも土偶や矢じり、石斧などが出土していて、土器の破片も多く出土しています。

昔は家の敷地や畑からこのような物が出ても遺跡だと分からず、縁の下や軒先に置いたまま特に珍しくも感じていなかったのですが、縄文時代の石器と知って驚きました。



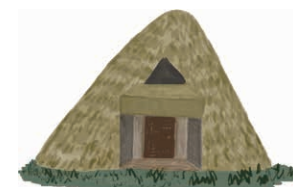
〈浮野遺跡から出土した石器や石棒〉1.石棒 2. 石匙(いしざじ) 3. 壺型(つぼがた)土器／写真の土器は室根支所の1階ホールに展示しているので、実物を見ることができます。

お話をしてくれた方



おいかわ しょういち
及川 昇一 さん

文明が進化して、どんどん新しくなるのもいいが、古き良きことを知ることも大切だと思います。過去があったから現在がある。縄文時代だって自然の中でそれなりに豊かだったのだと思うし、せっかく自然の多い所に住んでいるのだから、子どものうちからもっと自然に触れて、楽しく過ごしてほしいなと思いますね。



まだまだあるよ！

室根産

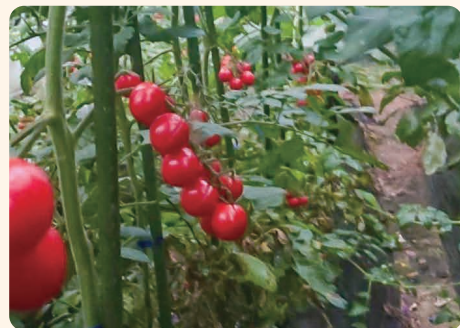


「室根の豆知識」では紹介しきれなかった、まだまだある室根産の魅力の一部をご紹介します。気になるものがあったら自分でも調べてみよう！



酪農

牛のお世話をしておいしい牛乳を出荷しています。みんなの給食にも出ているかも…？



トマト

いろいろな種類のトマトが栽培されています。室根地域外から買いに来る人も！



養鶏

全国的にも鶏の出荷羽数が多い岩手県。室根の鶏肉も日本各地に出荷されています。



畜産

お肉になる牛を育てています。育てた子牛は日本各地でブランド牛になることも！



西の沢地区のとうもろこし

西の沢地区で毎年栽培しているとうもろこしは、すぐに売り切れるほどの人気です。



室根のりんご

おいしくて県外にもファンがいます。ワインやジュースも人気！



加工品も
オススメです♪



小菊栽培

お供え花としてなくてはならない花です。遠くは広島や大阪まで広く出荷されています。

みんなに教えたいくなる 室根町の豆知識 ②

2024年 3月 発行

〈発行〉
室根まちづくり協議会

〈制作〉
室根まちづくり協議会 文化交流部会

〈取材協力〉
山本 郷 朝日堂製菓
星 和行 扇家菓子舗
奥野 幸市 金成屋
佐藤 好彦 ※敬称略
三浦 幹夫
菅原 隆儀
及川 昇一

〈写真提供〉
いちのせきハラミ焼なじよったべ隊
一関商工会議所室根支所
一関市
岩淵 一司
對馬 美佳
千葉 栄一
菅原 康祐
佐藤 武久
農事組合法人西の沢
株式会社オヤマ
※敬称略

〈参考資料〉
●「重要無形民俗文化財 室根神社祭のまつりバ行事」
室根村教育委員会発行
●「国重要無形民俗文化財 室根神社大祭記」
室根大祭協賛会発行